

# わぬの 和布が生まれ変わる瞬間が幸せなの

手芸サークル 蜻蛉 とんぼ

毎週金曜日、中町の宇野陽子さんのもとに7人の仲間が集まり、時間を忘れて「和布(和服の生地)の手芸を楽しんでいます。京都の友達が加わる時は泊まり掛けで来て、夜の9時ころまでチクチク……、朝も9時ごろからチクチク……。今回は「古い布に命を」をテーマに和布の手芸を楽しんでいる「手芸サークル 蜻蛉」取材しました。



手芸サークル 蜻蛉の代表者、宇野 陽子さん



活動場所には数々の作品が常設されています



6枚の着物柄をつないで

一枚の和布から作ったポーチと小銭入れ

手元の細やかな動き

和布を使ったカバンや帽子  
大好きな手芸をサークルに

子どものころから手芸が大好きだった宇野陽子さんは、22年前にご近所の主婦と「手芸サークル 蜻蛉」を立ち上げました。ここでは思い出の着物などが、身につけられるカバンやインテリアなどに生まれ変わります。あでやかで落ち着いた和布の小物やインテリアがブームのようになっていたころでもあり、サークル活動は活発で、同地域の古民家を使って何度か開催した作品展(蜻蛉展)では200人、400人もの人出でにぎわいました。

市内外からの依頼を受けて作品展をしたり、メディアの取材を受けたり、市長室前にリバーシブルの几帳(きょうちょう)が飾られていた事もあります。

家庭の事情や高齢化でサークルを抜ける「近所さんや新しい

手芸の大好きな新しいメンバーが加わったりしました。サークルの活動場所であり作品展を常設していた古民家に住むことになり、現在のメンバーによる作品展を開いた事がないのが悔いだった。来年にも実現したいと意気込んでいます。

思い出の大切な着物だから  
形を変えてそばに置きたい

「古い布に命を」がサークルのテーマ。テーマの裏側にあるのは宇野さんご夫婦の歩み。宇野さんご夫婦は呉服製造の傍ら芸能人の舞台衣装などを手掛ける着物のデザインやスタイリストのような仕事もしていました。納得のいく衣装になるまで失敗や試作を繰り返すので、ご夫婦の手元には目の目を見ることがなかった反物や着物がたくさん溜まりました。正絹の良い品で、一点一点に思い入れがありました。

そこで、宇野さんは「大切なのに使われない着物などの和布を、形や用途を変えて身につけられるものに生まれ変われば、いつもそばに置いて愛用できる」と考えました。

手芸という趣味には参加しないご主人も、仕事で培ったアイ

会えて幸せ」「若いころは忙しくて全然できなかった。今になってこうして好きな事に没頭できることが嬉しい」などと、メンバーは口々に話していました。

和布に新しい命を  
手芸に新しい人の輪を

手芸サークルの活動で使う和布は、主にご夫婦が仕事で溜めてきた反物や着物です。一方で活動を聞きつけた人や、作品を差し上げた人が筆筒に眠っていた思い出の着物を提供してくれることも多いといえます。

また認知症の傾向がある人でも手芸が楽しめるよう、和布のパーツを細かく用意して、仲間たちと一緒に「近所の高齢者施設などにお邪魔してボランティア手芸教室をしています。高齢女性は若いころに裁縫(さいほう)や手芸をたしなんでいた人が多く、嬉しそうに手を動かす姿に「同じ手芸が好きで、とても嬉しい」と思うそうです。

手芸が取り持つ人の和、思い出の和に思いを馳せながら、宇野さんと手芸サークル 蜻蛉のメンバーは、今日もチクチクと和布に新しい命を吹き込んでいます。



ドアとセンスで作品作りの良き相談相手になって、手先の器用さや和布への思いも陽子さんと同じだそう。和布でタペストリーを作ったり、庭先のテラスを板張りにしたりと別な形で「和へのこだわりを楽しんでいます。サークルの活動場所にある椅子のクッションも、実はご主人が自ら和布に張り替えられたとか。

大好きなことできる幸せ  
宇野さんの人柄にひかれ

和布を使った洋服や6枚の着物をつなぎ合わせたお洒落着(着物)なども作れる宇野さんは、サークルでも先生役ですが、宇野さんご本人は「手芸が大好きで集まった仲間だから、先生なんていないのよ」と笑顔をこぼします。気負わずに好きなことを楽しむ手芸サークル 蜻蛉を象徴しているようでした。

宇野さんの人柄にひかれて集まった手芸が大好きなメンバーは、手先を器用に動かしながらお喋りに花を咲かせています。「お料理も上手で「馳走になることもあるのよ。編み物を教えてもらうこともあるの」「手芸という趣味を通して広がる人の和が嬉しい。ここで手芸に出